

英米文化学会会報

第 37 号

平成 10 年 10 月 30 日版

目次

日本学術会議広報協力学術団体登録申請中
文部省学術情報センター学会ホームビレッジへ参加予定
第 16 回大会盛会裡に終了
英米文化学会第 98 回例会 (レジメ付き)
会員による出版
事務局より

◆日本学術会議広報協力学術団体登録申請中

かねてより検討しておりました、日本学術会議広報協力団体申請を行いました。この申請が認められますと、「公に」認められた学術団体として登録され、名実ともに公認された学術団体へと華麗に(?)変身することとなります。今回の申請は、日本学術会議登録学術団体登録受付の間隔が長いので(3年に一度の申請受付)、広報協力学術団体の申請により同格の扱いとなる予定です。日本学術会議の詳しい紹介は <http://www.nichigaku.go.jp/> にてご覧いただけるとと思います。

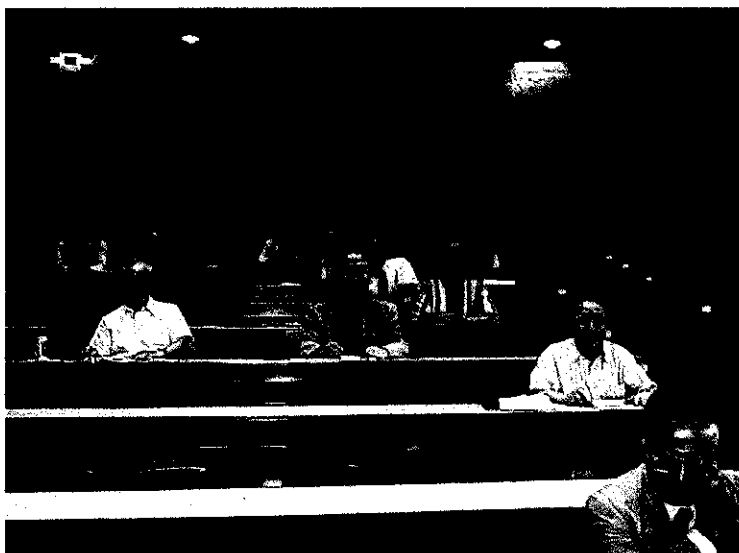
◆文部省学術情報センター内の学会ホームビレッジへ参加予定

上記の日本学術会議への登録が終了するのを待って、文部省学術情報センター内の学会ホームビレッジ (Academic Society Home Village) に参加すべく準備中です。登録団体に対しては、無料で学術情報センターのコンピュータ上に学会ホームページを置いたり、当学会の学術論文の開示などが行われます。詳しくは <http://www.nacsis.ac.jp/nacsis.index.html> をご覧ください。

◆第 16 回大会盛会裡に終了しました

東京農業大学オホーツク校の施設をお借りして、第 16 回大会は盛会でした。大会両日とも台風による雨となりましたが、参加者が多く、最も多かった時で 70 名程でした。

宿泊したオホーツク渚亭では、皆様にご満足いただけたかと思えます。全室オーシャンビューということでしたが、あいにくのお天気で、知床半島まで見えたのは少しの間でした。



第 16 回大会風景

◆英米文化学会第 98 回例会のお知らせ

標記の例会を下記の要領で開催します。

開催月日：平成 10 年 11 月 21 日（土）

場 所：日本大学歯学部 3 号館（お茶の水ニコライ堂隣）

時 間：15:00-17:00 受付 14:30 より

例会終了後に、本年度は大会を網走で開催しましたので、都内での忘年懇親会を開催します。お顔を出せる今年最後のチャンスです。忘年懇親会のみでの参加も勿論結構です。さまざまな専門の会員と談論風発のよい機会です。振るってお申し込みください。キリンシティ側のご好意により当日は貸切りとなっておりますので、ビール党にはこたえられない一夜となることでしょう。

忘年懇親会：於 キリンシティお茶の水 03-3233-3070（千代田区神田駿河台 2-4 ウィーンビル B 1）
会費 5,000 円（大学院、学生割引あり）

例会会場ならびに忘年懇親会の地図は、

<http://www.threeweb.ad.jp/~shakey23/nusd.html>

にて掲載中です。

研究発表タイトルと司会者

1. British Cultural Studies の現場 —— 理論と実践の狭間で

渡辺 愛子（学習院大学）
司会 宮本 和恵（東洋大学）

2. 『チャタレイ夫人の恋人』における D.H. ロレンスの技法について

須田 理恵（日本大学）
司会 市川 仁（中央学院大学）

3. ポライトネス再考：ビジネスレターにおける「断りの構造」の日英比較

増澤 史子（昭和女子大学）
司会 糸井 江美（日本大学）

◆第 98 回例会研究発表レジメ

1. British Cultural Studies の現場 —— 理論と実践の狭間で 渡辺 愛子

近年、世界各地でグローバル化が進むにつれて、文化的国境というものはますますあいまいなものになり、各国の国民性、地域性とは何かという問題がさまざまな学問分野において研究対象とされるようになってきた。いわゆる「地域研究」(Regional Studies)は必ずしも目新しいものではないが、最近日本でも注目され始めている Cultural Studies は、この 2, 30 年の間にその発祥地であるイギリスからアメリカ、そしてアジアにも広がりはじめた比較的新しい研究領域である。一般に「差異の政治学」と呼ばれる Cultural Studies の研究概念の一つは、過去の学問の細分化傾向を見直し、「学際的な」(interdisciplinary)見地から文化という有機体を多角的に解釈しようというものである。この手法は、これまでにある程度の成果を上げてきたといえるが、その反面、まさに「学問」という区別を否定した「学際」をみずから標榜するという独特な特質のために、種々の学問の高等教育機関である大学との間に、不協和音を生み出しているように思われる。本発表では、最近になって特に顕在化しつつある、British Cultural Studies の理念と現実のひずみと将来的展望について、早くからこの研究領域に賛同しているイギリスのウォリック大学の例を参考に考える。

2. 『チャタレイ夫人の恋人』における D.H. ロレンスの技法について 須田 理恵

小説家は時代や置かれた環境によってその技法を変えるものであるが、ロレンスもその例に漏れない。『恋する女たち』を書いて 10 年を経て、オーストラリアで書いた『カンガルー』では象徴的というより貼り絵のように事実とフィクションを集めて書いたコラージュの描法を用いたといわれる。ロレンスは或る意味で意識的に技巧を凝らしている小説家である。また、小説家を職業とするというよりも、生きることが真っ先にあった独特な小説家であった。フリーダとの結婚がロレンスの人生の大半を支配したが、当然作品のなかに二人の生活は活写されている。『カンガルー』で亭主関白、それとも友人か、という立場の選択を迫られたロレンスは、「生涯あたたためていた」とフリーダの言う『チャタレイ夫人の恋人』では

いかなる姿で登場するのであろうか。牧歌的とも神話的ともいわれる作品において、夫婦の在り方が、いかに変化し描かれているかをその環境と立場などを鑑みながら考察する。

3. ポライトネス再考：ビジネスレターにおける「断りの構造」の日英比較 増澤 史子

「丁寧に断る」という行為は double bind である。つまり、「断る」ということ自体は “rude” で、断り方は “polite” にという言語活動を同時におこなうことを余儀なくされている。「断る」という言語活動は「謝る」、「褒める」などと同様に Speech Acts の分野で現在に至るまで、数多く議論されてきている。Politeness に関しても 1970 年代からさまざまな角度から研究がなされてきている。代表的なものは Lakoff, Brown & Levinson, Leech, そして最近では Fraser が politeness の原理や定理をとりあげている。その中で、今回は書き言葉における “refusal” をとりあげてみた。“refusal” の研究の多くは会話を取りあげているものが多い。その理由の一つとして、断るというネガティブな言語活動を文字に残しておきたくないという心理が働き、できれば口頭で断り、証拠が残らないほうが好ましいといった態度が日米のビジネス社会で見られる傾向のようである。したがって資料が集めにくいのである。また、口頭による研究も、その多くはアンケートに頼るものが多い。実際にテープレコーダーを仕掛けても特定の断りの言語を入手するのは容易ではない。よって今回は「断りの手紙」中でも入手可能であった「不採用通知」に焦点をしばって “Polite Refusal” とは何かということを英語の通知文と日本語の通知文を比較検討してみた。その結果により、Pragmatic Transfer を始め、実際ビジネスの現場で求められている日本人の英語は何か検証する。

◆会員による出版のお知らせ

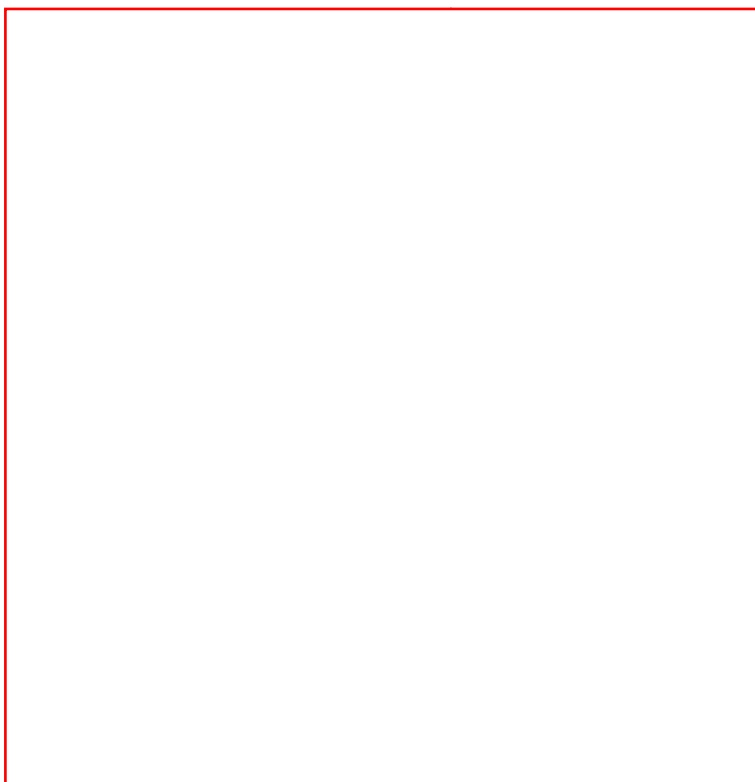
前会長勝浦吉雄先生、マーク・トウェインの最高傑作『ハックルベリー・フィンの冒険—附翻訳小史—』（文化書房博文社、¥2,800）をご出版。

附録の「翻訳小史」でも分かるとおり、先行の主要な翻訳を丹念に検討されたうえでの先生の自信作で、非常によくこなれた読みやすさ最高の翻訳であることは疑いの余地なしでしょう。ぜひ読んでみてください。（名和雄次郎）

宮本和恵・正和両先生訳、『フォルスタッフ—見捨てられた喜劇役者』（こびあん書房 ¥1,500）が出版されました。

◆事務局より

◆新入会員



伊藤 宏美 (いとうひろみ) 三菱商事
〒249-0006 逗子市逗子 4-3-8-201
電話自宅 0468-72-7377
hiromi.ito@jp.mitsubishicorp.com

村井 まや子 (むらいまやこ) University College London 博士課程在学中
〒655-0896 神戸市垂水区中道 4-1-24
電話自宅 078-751-3614
top@handel.freeserve.co.uk

森 千佳子 (もりちかこ)
〒166-0001 杉並区阿佐ヶ谷北 3-42-16-403
電話自宅 03-3310-2691
FAX 自宅 03-3310-2691
chikakomori@msn.com

◆住所などの変更

今回は、住所録を同封しておりますので、住所変更のあった会員のお名前の掲載のみとさせていただきます。ここにお名前の掲載されている会員は、電話番号の表示形式に誤りがありまして、総務の方で修正した場合も入っておりますので、必ずしも転居されたという意味ではありません。)



◆入会手続き簡素化により入会者激増

会報 36 号でお知らせしましたように、入会手続きを簡素化したところ、8 月末から 10 月末で 7 名の入会者がありました。従来は、会員の紹介者を介し、例会・大会に出席いただいていた入会方式を採用していましたが、地方・海外留学中の方からの入会問い合わせも増加してきましたので、手続きの簡素化に踏み切った次第です。新しい入会手続きは：

- 1) 事務局に入会の問い合わせをする (郵便、ファックス、電子メールで可)
- 2) 入会案内と申込書送付 (郵便、ファックス、電子メール)
会費納入 振込先 **郵便振替 160-7-611777**
- 3) 入会手続き完了 (電子メールの場合は、事務局から確認メールを出します)

という順序となります。財務担当者からの会費納入の連絡メールが事務局に入った時点での入会手続き完了となります。郵便よりもファックスか電子メールだと手続きその他がより速やかに行われますので、お知り合いで入会希望者がいましたらそのようにお伝えください。

◆電子メールアドレスをご連絡ください

現在のところ約 70 名の会員 (会員の三分の一) が、電子メールアドレスを取得されております。ご勤務先で電子メールアドレスを発行している場合は、ぜひ学会事務局までメールにてお知らせください。NiftyServe などの大手 BBS のアドレスも対象となります。学会のニュースなど、メール到達可能会員への英米文化学会からのサービスが始まっております。紙の形式のこの会報よりも格段に早くニュースなどをメールにて配布しております。

英米文化学会会報 第 37 号 編集・発行：英米文化学会編集委員会＝池田 広子、小川 喜正、
岸山 睦、中村 豪、山根 正弘

発行責任者： 中村 豪 〒

問い合わせ先 英米文化学会事務局 佐藤治夫 TEL 03-3219-8160 E-mail:

学会ホームページ <http://www.threeweb.ad.jp/~shakey23/>